

---

# 魅惑の嫁入り道具

コーヨ ケイコ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魅惑の嫁入り道具

### 【Zコード】

Z0629R

### 【作者名】

ヨーヨ ケイコ

### 【あらすじ】

結婚式前日、母から渡された「それ」は世にも奇妙な嫁入り道具だった。

母から娘へ受け継がれる、ちょっと危険で魅惑的な家庭円満の秘訣とは……？

(前書き)

少し不思議（SF）の作品に分類されるとおもこます。  
ちやんと落ちがります。

「こよこよ明日ね」

式の前夜、母が私の部屋に訪ねてきてしまじみとそいつった。

「…うん」

「お父さんはああ言つてたけど、戻つて来るんじゃないわよ」

「…うん」

母は笑つて言つたが私は一緒に笑えなかつた。一十五年も過りじて  
きたこの家を

離れるなど私の想像外だ。家族と毎日顔を会わすこともなくなる。  
私の立場も娘から妻になる。

「私は、もうこの家族の一員ではなくなるのか。

そう思つと急に悲しく思えてきた。明日から始まる生活は、全く新  
しい未知のものだ。それがたとえ好きな人とであつても不安な気持  
ちは拭えない。

「何そんな辛氣臭い顔してんの。明日は詩乃にとつて記念すべき日  
になるのに」

母はどんな時でも明るく優しい。

「母さんはね、あんたが幸せになつてくれる」ことが一番嬉しいの。ほんとよ。だから精一杯がんばって、いい家庭を作りなさい」

目頭が熱くなつてしまい、不覚にも泣いてしまつた。

「ああ…私は」こんなにも不安で一杯だったのか。自信がなくて、誰かにやつこつて欲しかつたのだ。

「やあね、おめでたことなのに。ほら、泣かないで」

母は軽く私の背中を叩くと、

「一母さんもね、お嫁に行くときはなんだか寂しい、不安な気持ちになつたの。

今のは詩乃と同じね」

肩をすくめて笑つてみせた。私は幼い動作で目頭を擦る。

「せしたら結婚式の前日に母さんのお母さん、つまつお祖母ちひさん  
がね今の母さん

みたいに訪ねてきたの」

「くえ……」

昔の話をする母さんが珍しく、私は心から聞き入つていた。涙はほとんどの乾いて少しだけ頬がつっぱつた。

「……そうしてこれをくれた。母さんの唯一の嫁入り遺具よ

そつこつて母は一つの見たこともない小瓶を私に手渡した。美しい曲線を描く透

明なガラスの瓶に薄紫色の液体が入つていて。アールヌーヴォー調のクリスタルと紫色は妖艶な雰囲気を醸しだし、一見それは高級ブランドの香水か何かのよつに見えた。

「これ、なに?」

私は薄紫色の液体を指さして聞いた。瓶の蓋を開け鼻を近づけてみたが、特に何も匂わない。母はくつくつと笑つた。

「何も匂こやしないわよ。それはね、詩乃。家庭円満のための魔法の薬なの」

「……なに、それ」

私は困惑した。一魔法の薬? 家庭円満のための?

田頃、母はこうこうつ冗談を言つタイプではないので私は大いに面食らつた。確かにうちの家庭は夫婦とも仲睦まじく、近所からも羨ましがられるほどの円満家

庭だつたがそれとこの薬が関係あるよ? とにかく見えない。

母は私の手のなかにある小瓶を懐かしげにみつめて唐突にいった。

「ねえ、詩乃。いい家庭を維持し続ける条件つて何だと恩づ?」

そんな条件なんてあるのだろうか。「いい家庭」の模範の様な環境で育つた私には考えてみたこともない。母は続けた。

「それは寛大な母親よ。夫の小さな浮気も、子供のささやかな反抗も全てを許し受け入れられる大きな器なの。母親が些細なことで感情的になつたり、家の中で神経を尖らせていては自然、家庭のなかもペリペリとした雰囲気になつてしまつわ」

なるほど。そうかもしない。母はいつも鷹揚で終始おつとりと微笑んでいるイメージがある。私は母親が激怒したりヒステリーを起こしたことがないことに今更ながら気がついた。

「いい？一家の大黒柱は父親でも家庭の中心は母親なの。良妻賢母とは男親を立てながらも全ての采配をして家庭を潤滑に運営する手腕を持つた女性のことなのよ。どちらにしろ菩薩のような寛大さが最も重要な。そしてその瓶の中身は私にそれを可能にしてくれたわ」

そういつて母は私を見つめた。

「驚かないでね。詩乃、それは毒薬なのよ。致死量が一ミリグラムで死体から薬が検出されないという我が家秘伝の劇薬なの」

「うそ！」

思わず瓶を取り落としそうになつた私の手を母が慌てて抑える。

「しっかり持つててちょうだい。危ないわねえ」

「マジなの、母さん？だつたら危ないのはこつちの薬の方よー」

私は声を荒らげた。そんな危険な毒薬を結婚式前田の娘に手渡さないで欲しい。私はその神経に呆れ返った。冗談にも程があるとはこのことだ。

「第一これをどう使えば家庭円満の薬になるつていつの?」

「あら。誰も使うなんていつてないわよ」

「でも、せつね…」

「ちょっとは落ちつきなさい。氣の早い子ね。だいじょうぶ、母さんだって使つたことなんかないわ。これは使わないことに意味があるの」

使わないことに意味があるとまどつ言つことだらう。いやいや、使つたことがあるとしたらそれはそれで大問題だが。

「要は心の問題なのよね」

どこか達観した口調で母は言つた。

「寛大な人間には心に余裕がある。心の余裕、それが寛大さに繋がると恩うの。いえ、実際母さんがそうだつた。心に余裕がもたらされたからこそ皆に優しく、落ちついて接することが出来たんだと思う。母さんの心の余裕の源はこの薬だったのよ」

「は、はあ…」

「「」の薬を持つことでみんなより一枚上手の様な氣になつたの。ど

んなに憤りしことがあつても『私にはこれがある、これとなつたら食事に混ぜてやる切り札があるのよ』つて

私はサッと血の気が引く音が聞こえたよつた氣がした。胸に常に毒薬を秘め、溜飲を下げる母の姿はそつとしない。否、想像さえしたことになかった。断じて私の母のイメージではない。

幸い母は私の心中を察したのか、すぐに「別に本気じゃないわよ。極端に言えばの話」と付け加えたので内心私は胸をなで下ろしたのだが。

「やつ思つとだんだん冷静になつてきてね、そんな小さなことで田ぐじりを立てる自分が小物に見えてきたの。私にはこの薬とこうのもがあるんだからもつと寛大にならなくつちやつ、つてね

「や、そんなんもんなの！？」

この年になつて母の新たな一面を知つてしまい、私はじぶんせどりに尋ねる。対する母はあつけらかんとしたものだった。

「そんなもんよ。どつかの国の核兵器とおなじね。焦る必要も苛々する必要も、この薬のおかげで私にはなかつたわ」

言葉が見つからなかつた。そんなものかと思えばそんなものだし、非常識といえばこの上なく非常識である。第一代々の嫁入り道具が毒薬だという時点で興に常識から逸脱している。だが代々伝わると、つこつここの薬に伝えるだけの価値があるということではないだらうか。我が家の中しか存在の知られていない秘伝の毒薬。

この珍奇な嫁入り道具は家庭円満という何物にも代えられない魅惑

的な性質を帶びていいのだ。

母は「この薬の存在のおかげで幸せな家庭を築く」とが出来たと言つていた。

だったら私の場合はどうなのだろう?

「これは私にはもう必要ない物。だから詩乃に譲るわ。これから必要になるのは詩乃の方じゃない?」

私は日本語を習いはじめたばかりの外国人のようになどたゞしく聞いた。

「……必要になるとと思つて母さんのよう」

「ああ、どうかしら。詩乃次第ね。ただ私が言えるのは?..」

私は母を、そして毒薬を見つめた。

「お祖母さんも家庭円満だつたつてことぐらこね」

「つして私は薬を譲り受けました。始めのことは瓶を見ては困惑することがままありましたが、一今ではあるのが当たり前の存在となつて私の側に置いてあります。

今は良い家庭を持つて幸せに暮らしていますが、薬が必要になるとがやはり何度かありました。あるとなしでは大きく心の有り様が変わることも分かりました。今では母や祖母がこの預を代々伝えた

気持ちが多少なりとも分かるつもりです。ある意味、とても優れた働きをする薬なのだと実感しました。

私の娘ももう年頃です。娘が嫁入りの際には、おそらく私も中身を一滴も使わないままこの遮を譲り渡すことでしょう。

しかし私には一つびつじても気になることがあります。

それは瓶の中身です。もちろん紫の液体が入っています。母からは毒薬と伝えられましたが、しかしそれは本当なのでしょうか？私もこの年になり娘に渡すことを考えて始めて気がきました。形だけのものとはいえ、実の娘に家族を害するための薬など渡す母親がどこにいるでしょうか？少なくとも私だったら渡さないでしょう。第一薬品反応の出ない劇薬などあるのでしょうか？あつたとしても昔のこと、どうやって手に入れたのか、我が家が薬師だったなどは聞いたこともありません。

母は五年前に他界してしまいました。そして、そのとき私は瓶の中身が紫色に着色しただけの、ただの色水ではないかと、ふと思いつたのです。

今となつては本当のこととは分かりません。

しかし……最近はそういうことなのだから、ただそう思つているのです。

(後書き)

いつこった傾向の作品がどのくらい好まれるのか知りたいと想っています。

またちゃんと文章が書けているか、表現が伝わっているかが気になります。

最後の落ちにつしても、もつとひねった方が良かつたでしょか？

全体的にもう少し質を上げていきたいと思っています。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0629r/>

---

魅惑の嫁入り道具

2011年10月8日19時11分発行